
神様達の憂鬱な日常

辰巳 結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様達の憂鬱な日常

【Nコード】

N3645K

【作者名】

辰巳 結愛

【あらすじ】

完膚なきまでに気分転換に書いた一品。辰巳クロスシリーズに登場する「22の神々」の日常(?)を描いたツツコミどころ満載の作品です。1つに付き、1柱の神を扱っております。クロスシリーズ本編よりも先に、色々なネタバレが出てくる事がありますが…そこはご了承下さい。

それでは、皆様のお時間を頂けたのなら光栄の極みでございます…。

XVII: The Star (星) (前書き)

こんにちは、辰巳結愛と申します。
最初に注意点がいくつか。

この作品は、私、辰巳の「ライダークロスシリーズ」の中の解釈、「22の神々」に焦点を当てた作品です。
故に、「ライダーが出てきて大バトル」、「戦隊が出てきて巨大戦」は微塵も無い(予定)ですのでご了承下さい。
基本的な設定は、現在連載中の「明瞭な夢、曖昧な現実」や「英雄の笑顔、悪者の涙」の一部後書きに掲載しておりますが……それで不明瞭な点が多い事請け合いです。
次に、掲載順は、ご覧の通りタロットカードの番号順ではありません。
ん。

そして最後に。当作品は、作者の気分転換の名の下に生まれた作品であります。

そのため、更新は本気で不定期です。ネタが浮かべば核……いや、書く程度の作品になります。

それでもOKと仰る奇特な方はお進み下さい。
では、参ります。

最初は「星」の憂鬱な日常……

XVII: The Star (星)

「……ダメですねえ……」

ふう、と溜息を吐いたのは、「星」と言う名の神。

ただし、この神は非常に特異な存在であり、7人で1柱の神として扱われている。

今回の溜息の主は、その「7人」の中で最も恐れられている「星の壺」と呼ばれる存在……エステルであった。

彼の表の顔は「死の商人」。様々な世界を渡り歩き、「上手く使えば」世界を滅ぼす事が出来ると言う物騒な物を売るのが仕事である。故に、あまりその顔に特徴は無い。せいぜい、「常に胡散臭い笑顔」と言う印象を与える程度なのだが……今回に限って、その笑顔すらも無い。

そんな彼の手元には、なにやらノートのようなものがある。

そこには数字がびっしりと書き込まれており、ところどころ「一」の記号もある。

「エステルたん？ 何をそんなに深あい溜息を吐いているであります？」

ひょっこりと彼の後ろから現れたのは、同じ「星」と呼ばれる神の中でも紅一点、ステラこと、ムダニステラ。ちなみに彼女の位階は最も低い「星の漆」。機械生命体と言う姿を持つためなのか、金属光沢がまばゆい着物のような物を纏い、その姿は花魁を連想させる。

普段ならエステルを避ける彼女だが、流石に今はちよつかいをかけても大丈夫と判断したのか、エステルの手元を覗き込む。

「これ、何でありんしょう？」

「私の決算簿です。期末ですから、今期の棚卸しをしているんです。しかし……」

そこまで言うと、エステルはらしくも無く再び深い溜息を吐き……

「今期、赤字確定です」

「嘘おんっ！ あの商売上手のエステルたんが、あ……赤字！？」

「本当です。私も我が目を疑いましたよ。何でこんなに赤字なのだろうか、と」

心底がっかりしたように項垂れるエステルを見ながら、ステラはびくびくとした様子でエステルから1歩離れる。

……怒っている。確実に怒っている。

彼ら「星」と呼ばれる面々は、基本的に「お金儲け」を目的に動いている。勿論、「始まりの地」と呼ばれる世界を侵略し、自分達の物にしたいと言う願望がない訳では無いが、優先順位は限りなく低い。

そんな彼らの帳簿が、「赤字」。

その事実を口にしたせい、エステルに顔に浮かぶ、いっそ清々しいまでにこやかな笑顔。そしてそれは裏腹に言葉に潜む無数の棘。

それが理解できたからなのか、ステラはその場を離れようと画策するが……時既に遅し。

彼女はエステルにがっしりと肩を掴まれ、それはもう首がもげるのではないかと思えるくらいかっくんかっくんと前後に揺さぶられていた。

「大体ねえ！ 園咲冴子！ あの女がいけないんです！！ ガイア

メモリの売り上げの70パーセントをこちらに回す契約をしておきながら、売り上げナンバーワンセールスマンだった霧彦君を婿に迎えて販売から手を退かせた挙句、使えないと分った瞬間殺してしまふなど！！ おまけに時々、無償でメモリを譲っていると聞きますしっ！ お陰で私の収入利益の大半を失ったじゃありませんか！！」

「な、70パーは、暴利を貪り過ぎでは……？」

ステラの言葉は正論なのだが、そんな事に耳を傾けるようなエステルではない。湧き上がっている怒りは未だに収まらないのか、苛

々とした口調で更に言葉が続ける。

「『魔術師^{マジック}』は私から買った『ゾル大佐コスプレセット』並びに『スーパークライシス要塞』の代金を踏み倒すわ、『皇帝』や『女帝』はこちらの金蔓^{しんまん}を悉く潰しまくるわ、『運命の輪』はこっちが売った『地の石のレプリカ』が壊れたと言って返金を求めてくるわ……ああっ！ 忌々しいっ！ 数え上げたら限が無いっ！」

「Ya—Ha。大荒れじゃねえKa、Estrelia^{エステル}？」

「ああああ、鬼^きいたん、いい所に来たでありんす。助けておくんない……」

「っTe、随分と瀕死だNa、Stella……」

口からぷくぷくと泡を吹いているステラの目に、天の助けとばかりに現れたのは「星の参」、鬼宿^{きしゆく}。額に1本の角を持つその姿は赤鬼だろうか。邪悪な衝動を好み、それを力に変える存在である。

呼び名の通り、彼の实力は「星」の中でも3番目。そこそこ強い部類に入る。

そんな鬼宿に目を留めたのか、エステルはステラからその手を放し、先程よりも更に凶悪な笑顔をそちらに向けた。

まるで、狙っていた獲物が来たと言わんばかりに。

「……Ha？」

「きいいしゅううくうう。よくもまあ、あなた、私の前に顔を出せますねええええ？」

「What!？ Why!？ ちょっと待てYo、Estrelia^{エステル}、お前、Eyeが据わりまくってるZe……？」

「いいえ、もうこれ以上待てません。いい加減、あなたにお貸した金銭を返していただきませんかとねええ？」

笑顔だが、目はとことんまで据わっている。そんな存在を相手に、流石に「鬼^{オルク}」と言えど鬼宿もじりじりと後ずさった。

確かに、鬼宿はエステルに金を借りている。

ひとえに、人間にちよっかいを出すための費用として。

……時々自分のおしゃれの為に使っているとは、耳まで裂けた口

が、更に裂けても言えないが。

「Wait! 元は同じ『神』なんだから、その辺の融通は利かせろYo!」

「鬼宿の場合……額面、大きすぎ」

「Hey! Et^{エトワール}oile !!! こんな時に正論はNothing! って言うKaいつからそこにいやがっTa!?!」

「……最初から、いた」

「エトワールたん、いらしたでありんすか……」

「星の伍」、エトワール。見た目は……やたらと大きな口を想像していただければ、まず間違いない。その口を開けた中に、つぶらな瞳が2つある……「星」の面々にしては珍しい、完全な異形である。

ちなみに口の化物だが、やたらと口数が少なく、趣味は彫刻、特技は気配を殺す事、と言う、見た目に思いつきり反した性格をしている。

「……ズヴェズダも、一緒」

「ふえ?」

「ご、ごめんなさい、すみませんっ。その、さっきは、あの……助けられなくて」

言われ、振り返ると、そこには伝説に出てくる「悪魔」のような格好をした異形が1人、おどおどとした様子でその場に立っていた。

「星の陸」、ズヴェズダ。人見知りが激しく、エトワール同様存在感が薄いのが特徴である。

また、名前が言い難いことから、あまりその名を呼べない事でも、「7人」の中で群を抜いている。

「気……気付かなかったでありんす」

「ご、ごめんなさい。その、あの……存在感、薄くて……」

「エトワール、ズヴェズダ! サボっていないで内職の続きをしていてください!」

「は、はいっ! すみません、すみません!」

「おいおい……マジどんだけMoneyに困ってるんだYo……？」
呆れたような鬼宿の声が響いたが……エステルはそれをさらりと
無視したと言う。

「と、言う訳で。今回、事業仕分けを行う事にしました」
『……は？』

どこからか帰ってきたばかりの残り2人……「星の式」こと星髪
爪牙と、「星の肆」こと天狼を、無理矢理その場で正座させた後、
エステルは堂々とそんな宣言をぶちかます。

「事業仕分けってお前よお……そのネタ、旬が過ぎたらイタいだけ
だぞ？」

「と言うか、そもそも何故我らだけ正座なのだ……？」

「お黙りなさい！そこはノリです！」

ずびしつと2人を指差しながら、いつもの冷静さをどこかに置き
忘れてしまったらしいエステルが突っ込む。

ここで「ノリかよ」などと突っ込もう物なら、後が怖いので黙っ
ておく2人。それを見てなのか、ステラがおずおずと言った様子で
手を上げ……

「と言うか……そもそもなんで、わっち達は赤字なんでありんしょ
う？絶対他の神様よりも稼いでいるはずでありんす」

「決まっているでしょう？うちは……私達『星』は、他所の神に
比べて、大所帯過ぎるんですよ！！」

『あ』

そう。そもそも「星」と言う存在自体が特殊なのだ。何しろ、「
7人」もいるのだから。ちょっとした二世帯住宅くらいの人数であ
る。

「他の神は1人または2人で1柱という核家族ですから、金などは
とんどかかりません。幽閉されているため三食昼寝付きと言う贅沢

を貪っているニートな『塔』とか、ロボットになっているのでメンテナンスをさえしていれば金など必要ない『力』とかいますが、そこは例外です。と言うか、そんな楽をする連中など、殺してそのパーツを売りさばきたいっ！ オーバーテクノロジーの塊ですからね、フフフフ……良い値が付くと思いますよ……」

「怖い怖い怖いっ！　いくら何でもそりやまずいっTe！」

「つか目がマジだぜ、エステル」

「とにかく！　他所の連中をいつ殺してパーツ^{バラ}を売るかは私が決めます！　それは本当に最終手段です」

「いつかは……やる気なのか」

エトワールの小さなツツコミが入るものの、エステルはそれをさりと流し、まるでその辺の政治家よろしく、ぐっと拳を固め……どこか使命感に燃えた瞳で、言葉が続けた。

「今現在、事業仕分け……我々の無駄を削減します」

「無駄で。いきなりステラを削減しそうな勢いだなア」

「うむ。名が『ムダニステラ』なだけに」

「止めておくんないいいいっ！！　今現在、マジ洒落にならない状況でありんすからあああっ！」

天狼と爪牙の言葉に、物凄まじい勢いで泣きつくステラ。

先程のエステルの言葉を聞く限り、「機械生命体」と言う形を取っているステラに関しては、本気でバラバラに分解されてパーツごとに売られても不思議ではない。と言うか、金の亡者であるエステルならやりかねない。

「ステラの場合、分解しても部品^{パーツ}にろくな値段がつかないので却下です。貴女は今後しばらくの間、風呂上りの一杯を禁止します」

「そんなっ！　わっちの『錆の涙』があああっ！」

泣き叫ぶステラの腕から、「錆の涙」と書かれた一升瓶を容赦なく取り上げると、エステルはそれを鍵のかかった冷蔵庫に封印してしまう。

……そもそも、そんな冷蔵庫は一体どこにあったのか、ズヴェズ

ダには不思議で仕方ないのだが。

「……なあ、アレって確Ka、廃油だよNa？」

「そこから……禁止、か」

「ろくな値段がつかない」と言われた事よりも、「風呂上りの一杯の廃油禁止」された事の方が悲しいのだろうか、と泣き喚くステラを見つめつつズヴェズダは冷静に思うが、仲間が死なずにすんだのだから良しとしようと考え直す。

しかし……廃油から禁止とは、ひょっとするとほとんどの嗜好品廃止なんじゃなからうか。

「爪牙は刀を砥ぎに出すのをしばらく控えて下さい、それから、天狼はアイパッチの無駄な収集禁止っ！ 鬼宿はさっさと無駄な服を売って私に借金を返済して下さい」

「ちよっ……」

「お洒落はNiceな男の必要事項だろうGa！」

「んっんっん。嫌なら良いんですよお？ 鬼宿と天狼を殺して髪一筋も残さず綺麗に売りつくすだけですから。その狼の毛皮なんかはさぞかし高く売れるでしょうねえ。鬼の角も、『一角獣の角』とか言って売りつけられ、それなりの値になるでしょうし？ ああ、無駄飯喰らいも減りますから、随分と赤字を補填出来そうですねえ？」

『ごめんなさい』

「よろしい」

本気でやりかねないエステルに、瞬時に土下座して謝る2人。

その横では黙々とエトワールが木彫りの熊を作っている。

「案外、鮭が……難しい」

などと呟いているが、一体どこの名産品を作っているのか。

……腐っても「神」が作った一品。ある意味、貴重と言えば貴重な土産物かもしれないが。

「それからエトワール、あなたはしばらく食事制限をかけますのであしからず」

「……………何!？」

「あなたの食費に、一体いくらかけてると思っているんです!」
ぽろりと、持っていた彫刻刀を取り落とすエトワールに、エステ
ルは容赦ない一言を浴びせる。

先にも述べたが、エトワールは「口の化物」。食べる量は、半端
ではない。

「食事は……楽しみの1つ……」

「彫刻を思う存分楽しんで下さい。売ればそこその金になります
し。最後にズヴェズダ」

「ひゃいっ!？」

「……何をビクついているんです。あなたの場合は削減のしようも
無いくらい既に削れていますので……色々な組織に潜り込んで、売
れそうな物を片っ端から売って下さい」

それ、横領って言うんじゃない？

心の中でのみツツコミつつも、結局はその勢いに飲まれ、彼らは
結局その指示に従うのであった……

園咲若菜の、「ヒーリング・プリンセス」。そのラジオ番組に、
「風都に出没する怪人の目撃情報」が寄せられるコーナーがある。

例えば今日は、「星の守り神」と名乗る存在が作った木彫りの熊
が、かなりの高値で取引された後、その熊が怪人になって食料を奪
っていったとか、質屋に泣きながらデザインの良い服を売りに来た
赤鬼が出たとか、別の質屋ではおどした悪魔が奇妙な物品を売
りに来たとか、ガソリンスタンドで物欲しげに見つめる銀色の花魁
が現れたとか……そんな噂を取り上げている。

『フフ。風都には本当に、色んな怪人さんがいるんですね』

そう締める若菜の声に耳を傾けながら、「鳴海探偵事務所」の所
員であるフィリップは、実に興味深そうに下唇を撫でていた。

「質屋に出没する悪魔や鬼か……いいねえ。ゾクゾクする」

「会いたくねえだろ、そんなもん……」

「そもそもその連中、ドーパントかもしれん」

彼の言葉に、相棒である左翔太郎と、たまたま来ていた照井竜が突っ込むが……既に彼の耳には届いていないらしい。

「鬼」と言うキーワードで検索を始めてしまっていた。

「……駄目だこりゃ」

呆れ混じりに呟かれた言葉は、真昼の星に届いたのだろうか。太陽の光にも負けず、僅かに光る星達は、静かにその町を見下ろしていた。

そして……

「嗚呼……黒字にならない……」

くるくる回る風車の下。今日も今日とて、神様の嘆きが聞こえる

……

XVII: The Star (星) (後書き)

灰、こんにちは（「はい」の字違うっ！）
辰巳でございます。

「22の神々の日常編を書いてみよう」と思い、自分の中の神様設定の棚卸しも兼ねて書いてみた結果……こんな風になりました。まずは一番大所帯の「星」から。

こいつらは……アレですね、現在の「五色の戦士」に出てくる黒幕共です。設定としては、ガイアメモリを園崎家に横流ししている存在、と言う物があります。

……って、これって自分が嫌う「自己満足の作品」じゃないですか！？ 大丈夫なの！？

と言う不安がものっそいあるんですが……「神様も万能じゃないんだよ！」と言う意味も込めて、掲載する事を決意しました。

何しろクロスシリーズの本編って、割と重くなりがちなんですもの……

それでは、今回のところはこの辺で失礼させて頂きます。

また、気が向いた時にお会い致しましょう。

（それまでは本編の方を何とかしていきます……（本当か？））

0::The Fool（愚者）（前書き）

注意事項

まず1点目。今回の物語は、拙作「仮面ライダードライ」が完結した後を想定しております。

故に、現時点とは大きく異なる点がございますのでご了承下さい。

そしてもう1点。

零の口を借りて、冒頭部分……ある意味、様々な作品に喧嘩を売っております。

不快になられる方がいらっしゃると思いますが、どうしても思ってしまう事だったので。

さて、批難受けそうな冒頭ではございますが、それでもよろしい方はお進み下さい。それでは、「愚者」の、ある意味憂鬱な一日……どうぞ。

0..The Fool 〽愚者〽

ふと目をやると、ソファに座る零が、携帯電話を見ながら冷笑を浮かべていた。

彼の名前は「降幸零」。「Fool Search」と言うボク流のあだ名もつけている。

前からシニカルな子だとは思っていたけれど、ボクと「分かれて」からは、吹っ切ったのか更にシニカルになったような気がする。

……元々そう言う気質だったのだろうか？

思いながらも、ボク……「降幸ゼロ」こと「愚者」は、零の肩越しに彼の見ている画面を覗き込む。

「何を見てるのさ？」

「ん？ ケータイ小説……？」

「……何で疑問系？」

「いや、最近よく見かけるんだけどね。大体が『主人公が手違いで死んで、そのお詫びとして神様だか悪魔だかが、主人公に無敵の力を与えて他所の世界へ転生させる』ってネタでさ。冒頭があまりにもワンパターンすぎて笑える」

そこまで言うのと、零は再び冷たく笑い……

「死んだからって、そんな都合よく人間に生まれ変われるとは思えないんだけど。生き物って沢山いるじゃない、虫とか犬とか魚とか蛙とか植物とか」

「いや、そのお話の設定上、『お詫び』なんでしょ？ だったらとりあえず人間にするのが筋……」

「昔見た漫画は、やっぱり手違いで死んでしまった女の子の話でさ。体に戻ろうとしたら既に火葬されちゃって戻れない。だから、新しい体が見つかるまで、その子の魂は人形の中に入ってたよ？ しかも、新しい体を手に入れた後は、それまでの……人形に入っていた時までの記憶はなくなっていたしね。ご都合主義って言葉は嫌い

じゃないけど、ここまで行くと一笑に付す価値も無い。何かのきっかけで思い出すって設定ならともかく、記憶持ったまま転生？ 無い無い。絶対無い」

……うわぁ、またこの子はそんな色んな人を敵に回しまくるような発言を……

「大体さぁ、そんな『無敵の力あげるから何とかして』とか言うくらいなら、最初っから自分でやれば良いじゃない。あげるだけの力を持つてゐるって事は、自分にもそれだけの力があるって事でしょ？」

「それ言ったら元も子も無いよ。って言うか、良くまあ曲がりなりにもカミサマである僕の前でそこまで言えるね、零」

一応、ボクも「神」と呼ばれる存在の1人だ。精神生命体、とでも言うのだろうか。一応それなりに永い時間は「ボク」として存在しているし、「世界」を作るだけの力も、滅ぼすだけの力も持っている。「自分の世界」を持つてゐるなら、その世界の生命の生殺与奪にだって関わる事が出来る。

まあ、今ボクが住んでいるこの世界はボクが作った世界ではなく、間借りしているだけだ。この世界の住人の生き死にまでは干渉できない。

それに、神とは名乗るが、ボク達は不完全な存在だと思う。気持ち悪いくらい平等に生物を愛している訳でもなければ、妬みも恨みもする。

感情を持つてゐる時点で、「完璧」からは程遠い存在。突出した力だけが、得体の知れない物……「神」と呼ばれてゐるに過ぎない。大体ね、人間は神にすぎり過ぎ。人知の及ばない力が働けば「神」もしくは「悪魔」の仕業になるんだもん。

そもそも強大な力を持つ者が、そんなちっぽけな出来事に介入してごらん？ 耐え切れずにぶっ壊れるに決まってるでしょ？

「ゼロがカミサマを自称しているからこそ、だろ。君を見ていると、やっぱり『神とは全知無能である』って思うよ」

「いや、全知ですらないから。何も知らないから、ボクなんかは色んな世界に自分の分身を置いてる訳だし」

そう言った瞬間、零の表情が不思議そうな物に変わった。えーっと、こう言うのをこの国の人間は……

「どうしたの零、鳩が水鉄砲を喰らったみたいな顔して」

「それを言うなら『鳩が豆鉄砲を喰らう』だ。水鉄砲じゃない。いや、そうじゃなくてさ……」

「ん？」

「……いるの？ 色んな世界に？ 君の分身が？」

「あれ？ 言わなかったっけ？ まあ、教える必要も無かったしね、言ってなかったかも」

そう言った瞬間、零の顔が不機嫌に歪む。

何をそんなに不機嫌になる事があるのか、よく分らないのだけど……多分、彼の事だ。「そんなのがいるなら僕に憑くなよ」とか思ってるに違いない。

「いや、でもね零。ボクの分身、一部例外はいるものの、基本的には皆人外なんだよ」

「……天死みたいなの？」

「あー……うん。それに近いのも、いる。何なら今から見に行く？」

「……はあっ!？」

おお、素敵なまでのリアクションをありがとう、零。そう言う態度を取られると、連れて行こうという気になるよ。

にっこりと笑い、未だにきょとした表情で見つめる零の腕を引き、強引に他所の世界への扉を開ける。

まあ、この世界を司る神……「悪魔」には怒られそうな気がするけど、そこは零に任せよう。

楽しい事しかしたくないしね、ボク。

心の中でクツクと笑いながら、ボクは物凄い勢いで嫌がる零を連れ、1番関わりの深い世界……「皇帝」の納める世界へと向かう。

と言っても、開けた「穴」を通して1歩前に踏み出すだけで事足

りるんだけど。

上手い具合に到着したのは、都会の喧騒から離れた場所にある喫茶店、「JACARANDA」。

「ジャカラнда……？」

「ハカラндаって読むんだって。ここにボクの分身の1人がいるんだ」

にっこり笑う僕とは対照的に、零は諦めたように溜息を吐く。

うーん、「死神の使い」や「悪魔の子」と関わるようになってからと言うもの、随分と諦めが良くなったなあ。主に人知を超えた力に關して。

ここにいるボクの分身は「ジョーカー」。最初の分身にして、当初の目的をこれっぽっちも覚えていない奴。

いや、別にいいけどね。結構楽しく生活してるみたいだし。

ちなみにジョーカーとは、この世界の守護者である「アンデッド」を模した存在である。故に、滅多な事じゃ死なない丈夫な子だ。確か今は、「相川始」と言う人間として生活してたんじゃないかったかな。

カランとドアベルを鳴らし、ボクと零は店内に足を踏み入れる。

立地条件のせいか、それとも単に時間帯の問題なのか、店内に客はそれ程いない。だから、目的の人物、相川始を見つけるのもたやすかった。

極端に瞬きの少ない見開かれ気味の目、心許した存在以外は寄せ付けませんと言わんばかりの拒絶オーラ。

うーん、我が分身ながら何と人当たりの悪い。

零と言いジョーカーと言い、何でこんなに人嫌いが多いんだろ？ボクの反動？

出されたお冷を口に含みながら、ボクはのんびりとそんな事を考える。一方、ボクに無理矢理連れて来られた形の零はと言うと……ボクの視線の先、相川始を見つめた後、そっと囁くように言葉を紡いだ。

「……あの人の、どこか人外？」

「ああ、アレは仮の姿。本当はもっと……」

黒いしグロいよ、と言おうとした瞬間。再びドアベルが鳴り、何者かが店に入ってくるのだが……

「降臨。満を持して」

「はいこんにちはー。おねーさん遊びに来ちゃいましたー」

………おおうっ！　なんて都合よくボクの分身のハイテンション組が！　ナイスご都合主義っ！

青い蝶と白い羽根をばら撒きながら入ってきたその2人は、それはもう凄い勢いでボク達の側に寄って来た。

片方は蝶の羽と同じような、水色のエナメル服を纏ったおねーさん。「戦車」の世界を観察するために送った存在で、スマートレディと呼ばれている。

ボクの持つハイな部分を受け継いでいるのか、喋り方は子供番組のお姉さん。そう見せかけて、冷静に物事を見極める、ある意味1番観察に向いている子だ。

もう一方は、白鳥を連想させる異形。体にはよく見ると、金色で「SWAN」の意匠が施されている。自称王子、「月」の世界を観察するために送った存在で、彼の名はジーク。イマジンと呼ばれる種の異形だ。

彼は、「月」の世界が退屈だと言う理由でこの世界にやって来た存在。任務放棄もいい所だが、元がボクの分身であるせいだからつまらないと思えば放棄するのは当然か。

「あ、スマートレディさん、ジークさん、こんにちは」

この店の看板娘、栗原天音ちゃんが、そんなハイテンションかつ迷惑極まりない2人組を、さも当然のように案内している。

……スマートレディはともかく、ジークは今、どこから見ても人外なんですけど……？

「何、あれ？」

「アレとは無礼な。我が名はジーク。気軽にプリンスと呼ぶが良い」

「断る」

「即答ですね……」

ジークのプリンス発言をバツサリと切り捨てる零に、流石にドン引いたのかスマートレディは悲しそうな表情を作って答える。

とは言え、彼女の表情の大半は作り物だから、どこまで信じて良いものかわからないけど。いや、勿論ボクには彼女の考えている事くらいは……分りません、ごめんなさい。見栄張ろうとしてました。ジークはジークで、我が分身ながら気位が高いな……環境の差？ それともボク、本当はこんなに気位の高い奴だったのか？

どのみち、ちょっと落ち込むかも。しかも何か受け入れられてるみたいだし、何かジークはジークで活き活きしてるし。

いくら分身とは言え、別個体だから考え方まで分かるわけじゃないし……

「しかし……久しいな。まさか我が本体がここまで出向ゼロいてくるとは」

「まあね。ちょっとした暇潰し」

「まあ、それじゃあお姉さんと一緒ですね」

「いや、あの……暇潰しで僕を連れてこないで欲しいんだけど」
零がジト目でこっちを見ているけれど、そこは気にしない。と言うか、この面々を相手に、零の事を気にしてたら負ける気がする。

いや、何に負けるのかはちょっと不明だけど。

「でも、良い感じに集ったし、定例報告会としゃれ込もうか？」

「報告する事は、特にありません」

「こちらもない。と言うか、世界は私を中心に回っているのだ」

いやいや、流石に無い訳がない。少なくとも僕の知る限り、この世界は未だ「星」や「隠者」と言った陰険共に狙われているはず。

……んーまあ、「星」に関しては単純に金儲けのためだけに動いている気がしなくも無いんだけど……

しつこく「月」も何か企んでいるようだし、この世界は常に面白い事に溢れていると言うのに。

ジョーカーは自分が「愚者の欠片」と呼ばれる存在である事をす
つつつかり忘れ去っているからしょうがないとしても、割と友好
的な「戦車」の世界にいるスマートレディや、完全にこの世界に住
み着いちゃったジークが知らないなんて……

はっ！ まさか楽しい事を独り占め！？ それは駄目、許さない
よ！ 楽しい事が大好きなボクを差し置いて、何を……

「ゼロ、考えがだだ漏れ。自重しろ」

「じちよう……？ 自分を嘲り笑う事かな？」

「それは自嘲」

「じゃあお笑いコンビの片方？」

「……次長」

「自治体の長」

「市長」

「銀杏ぎんなんのなる木」

「イチヨウ……って遠いよ！ 僕は君と漫才する気はこれっぽっち
も無いよ！？」

がったーんと派手な音を立てて立ち上がる零。だけどね、既に今
のやり取りで充分に漫才になっているんだよ？

その証拠にほら、天音ちゃんが笑いを堪えているし、ジョーカー
は呆れ果てているじゃないか。

うーん、こうやって見ると、随分とジョーカーも人間らしくなっ
たなあ。悪い事だとは思わないけど、これは「大切な存在」を全員
失った時点での反動が怖いかな。まあ、この世界の出来事だから、
僕には余り関係ないけど。

「この人達は、ジークさん達のお知り合いですか？」

「はい。お姉さん達の上司に当たる方です。とっても偉いんで
すよお？」

「私としては、私以上に偉いと言うのが不本意だが……私がプリン
スなら、この男はキング……と言った所か？」

うわー、そういう言い方する？ だってボク、「愚者」だよ？そ

う言う「偉い人」になりたくなくて逃げ回っている、超が付く位無責任な神だってば。

そんなボクの気質くらい、知ってるだろうに、全く。

やれやれと言う思いと共にジークを見ると……変化などしないはずのその顔が、どこと無く意地悪く笑っているような気がした。

……何と言うか……僕ひょっとして、なめられている？

思って周囲を見回すと、にこにこーと底の読めない笑顔のスマートレディ、意地悪なジーク、呆れ返ったジョーカーにうんざりしたような表情の零。

それに……窓の向こう側では、哀れむような視線を送るもう1人の分身……神崎優衣ちゃんの姿。

……うう、神様に見られたくは無いか……これはこれで結構堪えるかも知れない……

「さてと、今日も収穫なし、と」

結局、「J A C C A R A N D A」で軽くおやつを頂いてから、帰ってくるなり僕はソファに身を沈めてそう呟く。

全く、彼らはいつになったらボクの為に働いてくれるんだろう。

これじゃあ、いつまで経っても「ボクの世界」なんて作れないじゃないか。

……やれやれ。自由奔放すぎるのも問題かなあ……

「神は全てを知っている訳じゃない。だから、全知全能たり得ない……」

「お前が何も知らない何て今更じゃないか。カミサマが掃除機のかけ方とか、タイムセールの時間とか……そんなもの、知ってるとは思えない。まして、人間の心の中まで知ってるはずも無い」

そっと溜息を吐いて吐き捨てるように言った時。ボクの目の前に、

零特製のペペロンチーノが差し出された。

全く……結局のところ、今のままが1番良いのかねえ。こんな、無力で無知なカミサマのままだ。

思いながら、ボクは赤唐辛子が聞いているスパゲティを頬張り始めるのであった。

「今更そんな事に気付くなんて、やっぱり神って無能なんだね」

「煩いよ、零」

「だけど、それくらいの方が……ある意味、親しみは湧くかな。完璧、最強な人生なんて、つまないでしょ？」

「慰めてる訳？ それとも、振り出しに話を戻す気？」

クスクスと笑い、軽口を叩き合いながら……今日もまた退屈で憂鬱で……安心できるくらい平和な一日が終ろうとしていた。

0..The Fool 〽愚者〽 (後書き)

今晩は。辰巳でございます。

今回は初っ端から、零を使って色んな作者様（と言うか作品）に喧嘩を売ってみました。零の台詞は、紛れも無い私の本音です。

作中にある「人形に魂を入れる女の子」の話は、漫画「アウター・ゾーン」の「マジック・ロール」シリーズです。ちなみにこの作品に出てくる死神さんは、お気に入りだったりします。

生まれ変わりの例の中に挙げた「蛙」は、漫画「なん〇か壊レ丸」に出てくる女の子が、1200年かけて人間に生まれ変わるまでに辿った中であつた物を引用しております。

個人的には、軽々しく「転生」と言う言葉を扱って欲しくないな、と。零の台詞ではありませんが、人間として死んで、すぐに人間になれると思ったら大間違いだと思うのです。

人間はそれ程偉くない、と言うのが信条ですから。

さて、半ば怒りに任せた戯言はさて置いて。

今回の物語は、「ドライ」本編終了後……天死との決着がついた後になります。

だから、「零」と「ゼロ」が分離……つまり、別の人間として登場しています。……はい、ネタバレです。

もはや零の中に住まうもう1人、「ゼロ」が「愚者」本体である事はバレバレですから、開き直っております。彼らは……まあ、最後には別個体として存在するようになる、と言う事です、はい。

それでは、何かがあるとその作品に逃げ込む私ではございますが、今後もお付き合い頂けましたら幸いです。

IV::The Emperor 〔皇帝〕（前書き）

注意

この作品は、現在上映中の「仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー 超電王トリロジー EPISODE RED ゼロのスタートウィンクル」の直前のお話です。

映画本編には全く関与しておりませんし、所詮この物語は辰巳解釈中での出来事ですから、既に映画をご覧になった方も、ご覧になっていない方も楽しめるかと思われます。

まあ、突っ込み所は相変わらずありますが……（「日常」じゃないとか、途中に出てくる解釈とか……）

何はともあれ、それでは「IV::The Emperor 〔皇帝〕」の開幕です。

IV::The Emperor (皇帝)

「陛下、定期報告です」

そう言いながら、野上愛理の前には珍しい客が訪れた。

黒いタートルネックのシャツの上に、白衣を着た男前の青年。顔に張り付いた笑顔は、人生を満喫しきっているように見える。

彼は、愛理の……いや、彼女の本来の姿である「皇帝」の忠実な部下の1人だ。「野上愛理」として地上にいるようになってからは、まだ1度も定期報告をしていなかったが、どうやらようやくここに来る気になったらしい。

やって来たのは良いが、現在リニューアル中のため店内が散らかっている時に来るのはいかなものだろう。最近、「時間の歪み」の影響で小さくなってしまった弟を買い物に出しておいて正解だったかも知れない。

理解すると、愛理は軽くその目を伏せ……いつものほんわかした雰囲気から、凜とした「神」たるに相応しい雰囲気を醸し出す。

「神」としての彼女は、滅多に來ない腹心の部下に、いつもよりほんの少しだけ意地の悪い笑みを浮かべ、声をかけた。

「お久しぶりです、玄金さん。定期報告は何百年ぶりでしたっけ？」

「あっはっはっは……」

「以前お会いした時は、確か侑斗と一緒にゼロライナーに乗った時でしたっけ？その節はどうも」

「あ……あははははは」

愛理の軽い嫌味に、思いつき目を反らしながら、玄金と呼ばれた彼は乾いた笑いとひきつった笑みを返す。

ある意味、当然ではあるのだ。何しろつい最近まで、玄金は自分を「皇帝」だと知らなかったらしいのだから。それどころか、自分まで利用して侵略者である「月」を撃退するような真似までしている。

そんなに自分は神としての威厳が無いだろうか、と思わなくもないのだが、他の神々に狙われる事の多い身としては喜ぶべきなのか嘆くべきなのか……

「すみません、ごめんなさい、勘弁して下さい。最近まであなた様が陛下だとは、全く気付いていなかった物ですから」

「何で謝るんですか玄金さん？ 怒ってなんて……いませんよ？」

「にっこり」ではなく「にーっこり」と言う擬音が似合いそうな笑みを浮かべながら、その場で土下座する玄金に向かって声をかける。

だが、彼も気付いているのだろう。愛理の言葉が、その通りでは無い事に。

と言うか、普段から人を欺く笑顔を浮かべている彼の事。おそらくこちらの作り笑顔に潜む感情など、手に取るように分かるのだろう。

笑顔のまま、額からだらだらと脂汗を流す玄金を見て、多少利用された事への怒りも収まったのか、彼女は軽く息を吐いた。

いくら温和な性格であるとは言え、愛理も一応は人間だ。怒りもすれば悲しみもするし、利用されたのなら腹だって立つ。

普段怒りを露わにするような事が無い分、その分自分の声に含まれる棘が鋭いであろう事は予想できるが……

「それだけ力いっぱい怒っておきながら、何を仰いますやら……まあ、これ以上のヤブヘビも嫌なんで、さっさと報告させて頂きますけど……」

彼にしては珍しい、引き攣った様な笑みを浮かべながらそう言うのと、手元にある報告書らしきものを見せながら分かりやすく説明を開始した。

普段から研究者と言う職に就いている事が多いためなのか、彼の説明は的を射ている。要点も分かりやすく整理され、研究内容の発表……所謂プレゼンに慣れている感じがした。

おそらく「皇帝の下僕」の中で、最も人間に溶け込んでいるのが

この男かもしれない。その分、自分の役目を放棄しがちな様ではあるが。

「……以上が、現状となります。当面は僕達4人で何とかかなりそうですが、はぐれイマジンに関しては手が出せないかもしれません」
「分かりました。出来るだけ大丈夫な様、よろしくお願いしますね」
全ての説明を終え、軽く一息吐いたのを見計らい、愛理は玄金に淹れたてのコーヒーを差し出す。

それを見ると、玄金の方も真剣そのものだった目元を緩め、普段の底の読めない笑顔を作る。

笑顔は、彼の処世術なのだろうか。

ふとそんな考えが愛理の脳裏をよぎる。何も知らなければ、彼の笑顔は人生を満喫している、幸せその物といった風な印象を受ける。大半の人間は彼の笑顔に騙されて、彼を「良い人」と評する事だろう。

最も、それは自分も同じ事かもしれないが。

そう思った瞬間、玄金は愛理の目を覗き込むようにその顔を上げ、心配そうな声を紡いだした。

「……陛下」

「何ですか？」

「あなたを利用した僕が言うのもおかしいのですが……」

「……？」

言い難そうに言葉を濁す玄金、と言う物が珍しく、彼女はきょとんとした表情で彼の次の言葉を待つ。

言おうか言うまいか、迷っているようだったが、やがて意を決したのか再びその目元に真剣な色を宿し……

「あなたは、いつになったら『桜井侑斗』と出会う気なんですか？」

その一言に、愛理の心臓はどきりと跳ねた。

桜井侑斗。かつて自分が愛し、また自分を愛してくれた人。けれど……彼は、世界を守る事と引き換えに、他人の記憶の中から消えた。

そのため、「野上愛理と婚約していた桜井侑斗」は消え……「今」はまだ「出会ってすらいらない事」になっている存在。

「野上愛理」としては忘れた事になっているが、実際は「皇帝」としての自分の力のせいなのか、時々泡のように「桜井侑斗」への想いが浮かんでは消えていくのを感じていた。

その度に、心が痛み、思い知らされる。

忘れていない。忘れられるはず……無いのだと。

「……侑斗……」

「……確かに、『野上愛理』は彼を忘れている。そう仕向けたのは僕であり、『皇帝』、あなただ。だけど、陛下」

真剣に……だけど、何故か苦しそうに言葉を吐きながら、玄金は真っ直ぐに愛理を見つめる。

彼に、罪悪感があるとは思えない。彼が「野上愛理」と言う存在に、「桜井侑斗」を忘れるように仕向けたのは、「皇帝」としての自分の命令があったからだ。この世界を守る為に、必要な行為だったはずだ。

だから、玄金が苦しむ義理はどこにもない。無いはずなのに……どうして彼は、こんなにも苦しそうなのだろう。

不審に思う彼女をよそに、更に彼は言葉を続ける。

「時が来たら出会える、と思っていらっしゃるのかもしれない。現に、あなたの御子であるハナちゃんは、若返ったとは言え存在している」

「それなら、何の問題も無いでしょう？ 私は侑斗と出会って、そしてあの子を産む。それが何年先になるのかは分からないけれど。それに私は、『野上愛理』である前に『皇帝』……この世界を治める者。自分の色恋に現を抜かしている訳にはいかないの」

ハナ……「野上愛理」と「桜井侑斗」の間に生まれるはずの子供の名だ。

未来を決定するための「分岐点の鍵」であり、彼女を守ると言う為だけに、野上愛理は桜井侑斗を忘れた。

……忘れたはずだった。

だが、心のどこかに、彼への愛は残っているらしい。店の真ん中に置かれている黒い望遠鏡を、「野上愛理」としての彼女は、愛おしそうに……そして切なそうに眺めている事が多い。それが、唯一残された、「桜井侑斗」との思い出の品だからだろうか。

「皇帝」ではなく、「野上愛理」としての自分は、何もかも忘れてしまっているはずなのに……

「……そうでしょうか？」

「え？」

「僕は、あなたが『皇帝である事』に振り回されているように見えるんです」

こちらを見つめたまま吐き出される言葉達は、「彼女」の心に突き刺さる。

それに気付いているのかは分からないが、玄金は軽く息を吐き出すと……そのまま言葉を続けた。

「確かにあなたは『皇帝』と呼ばれる『神』だ。それはひっくり返しようのない事実です。ですが……それと同時に、『人間・野上愛理』でもある」

「何を、言いたいのか？」

「あなたが人間である以上、人間に相応しい幸せを望んでも……いいえ、望むだけじゃない。掴んでも良いはずです」

「でも……」

なおも言い募ろうとする彼女に、玄金は更に迫り打ちをかけるように一言、今度は呟くように言葉を落とした。

「それに、あなたの子供はハナちゃんだけじゃない。……カイ君だっているんです」

カイ。「月」と呼ばれる神の送り込んだ侵略者……イメージを束ねていた、特異点の青年。

彼は執拗に愛理と桜井侑斗を狙い、この先の時間を「イメージの時間」に変えてしまおうと企んでいた存在だ。

だが、最後の戦いにおいて未来が決定した事により、彼の存在は消滅した……と言うのが表向きの出来事。

だが、それではおかしいのである。例えば自らの時間が無くなっても、時間の影響を受けにくい特異点であるカイが、消えてなくなるはずがない。

「野上愛理」の時には分からなかった真実が、「皇帝」である今なら理解できた。

……カイもまた、未来から来た自らの実子であった事を。

「『月』に唆され、操られたとは言え、彼もあなたの子供です。本来ならハナちゃんの弟に当たる。あなたもご存じでしょう？ アレ、特異点。それが己のルーツを否定したらどうなるかを」

「……死郎さんがやろうとしていた事です。生者が死に、死者が生きる。大規模な時間の改変が起きる」

時間の影響を受けにくい特異点が、自分の先祖を殺したらどうなるか。

ちょっとしたパラドックスだ。世界そのものが矛盾してしまい、暴走する。おそらく、「月」もそれを狙っていたのだろう。

「ハナちゃんの誕生日がずれたので、この時間軸ではハナちゃんの『お兄さん』って扱いかも知れませんがね。僕、そういう顔、してるでしょ？」

「何をする気です？」

「……陛下ならご存知でしょう？ 僕達4人は、『PRISON』の力を持つ。その対象は、ヒトの記憶にも及ぶと言う事を」

そう言った瞬間、彼は彼女の目の前でパチンと指を鳴らす。

その瞬間、ズキリとした一瞬の痛みを感じ、直後には堰を切った様に「野上愛理」の頭の中に、「桜井侑斗」と過ごした幸せな日々が溢れだした。

「ゼロノスのカードの代償は、他人の中にある特定人物に関する記憶」。でも、記憶なんて簡単に消す事は出来ない。……ただ、僕の力で封じているだけ」

「あ……」

「封じているのが僕の力なら、当然僕の力で解除も可能……って、アレ？　言ってなかったっけ？」

くい、と首を傾げながら、彼はゆっくりと席を立ち、扉に向かって歩き出す。

まるで、ここでの役目は、終わったと言わんばかりに。

だが、扉の手前まで来ると、彼は唐突に思い出したようにその手を打ち、くるりと愛理の方に振り返った。

その顔に浮かんでいるのは、いつもと同じ楽しそうな作り笑顔。そしてその顔のまま、玄金はすっとその目を細めると……

「……ねえ、『愛理ちゃん』。僕が君に言った言葉……覚えてる？」
「え……？」

「陛下」ではなく「愛理ちゃん」と呼んだ彼に、一瞬だけ戸惑いながらも、彼女は不思議そうに首を傾げる。「皇帝」と「愛理」の切り替わりが出来ていないのだが、そんなことはお構いなし……と言うかむしろ好都合らしい。

彼は口の端を更に吊り上げると、クツクと喉の奥で笑いながら、更に言葉を続けた。

「あの時……僕と契約をしてもらう時、こう言ったよね。『君達には、幸せになる権利と義務がある』って。アレ？　言ってなかったっけ？」

最初に、ゼロライナーに乗って自分と侑斗の前に現れた時の事をさしているらしい。

確かに、彼にそう言われた記憶が、うっすらとだが、存在する。

「だからね、もう幸せになるべきなんだよ。君も……侑斗君も。そんな気がする」

「玄金、さん？」

「……君は未来に縛られちゃいけない。僕と違って『人間』なんだから、現在を精一杯、幸せになる為に、生き抜かなきゃ」

それじゃあね、と言いながら、玄金は今度こそ扉を開けて外へと

出て行ってしまおう。

どうやら扉の外で良太郎とぶつかってしまったらしく、ゴン、と言う音と、あ、ごめ〜んと言う軽い声が聞こえる。

幸せになる権利と義務……

その言葉を反芻しながら、彼女は無意識のうちに「侑斗の望遠鏡」に視線を向ける。

「……侑斗……」

望遠鏡を見つめた刹那、彼女の瞳からは一筋の涙が零れ落ち、小さくて切なげな呟きを洩らす。

……どうやら、おせっかいな下僕は、案外と冷徹になりきれないらしい。

「皇帝」としての彼女はそれを苦く思うのだが、「野上愛理」としての彼女は、むしろ感謝すら覚え……

「姉さん……?」

「あら、お帰りなさい、良ちゃん」

彼女の涙を不審に思ったらしい弟に、にっこりいつもの温和な笑顔を向け……彼女は目元の涙を拭うと、何でもないのよ、と誤魔化す様に言った。

……この数時間後、彼女はとある事件に巻き込まれるのだが……それはまた、別の物語である……

IV::The Emperor（皇帝）（後書き）

と言う訳でどうも、辰巳です。一月以上間が開きましたが、いかがお過ごしだったでしょうか。

今回の神様は、愛理さんこと「皇帝」陛下。日常じゃありませんが、そこはご愛嬌で（苦笑）。

前書きにも申しました通り、これは「仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー 超電王トリロジー EPIISODE RED ゼロのスタートウィンクル」の直前のお話です。

……とは言え、構想は一月前からあったんです。玄金が愛理さんに「幸せになっても良いんじゃない？」とか、全く彼らしくない事を言う計画。

ある程度骨子を書いていた所、何故だかあつという間に「トリロジー」が公開、ボロ泣きしながら、「やっぱり早く皇帝の方を上げなきゃ!」と思い、書き上げました。

劇場版の感想が少し入りますが、見ていてとあるシーンで、「愛理さんはやっぱり皇帝陛下だー!!」と心の中で叫んでおりました。劇場の中心で陛下を讃える!

おつと拙い。危うくスルーする所でしたが……なんつー解釈をまたぶちかましてんだお前はー!!

カイ||愛理さんと侑斗の間に生まれた、2人目の子供

……実はこの解釈、一作目の「過去の希望、未来の遺産」でちょっとだけ顔を出しているんです。

最後の方のスフィックス&mp;バジリスクの会話です。

わーい、ふざけるテメェ的な反応が来そうな気がすごいヒシヒシと!!

そんなこんなで、また次回お会い致しましょう。

次回っていつになる事やら……

I..The Magician (魔術師)

「おのれディケイドおおっ!!」

「22の神々」のうちの1人、「魔術師」^{マガス}の朝は、その一言から始まる。

＊

某月某日、晴れ、「通りすがった世界」

今日から私、「魔術師」こと鳴滝は日記をつけ始める。それも全てディケイドのせいだ。

大シヨツカーを立ち上げただけに飽き足らず、今度は様々な世界を破壊する為に動きだしたディケイド。奴は「世界の破壊者」であると言う話は、どうやら本当らしい。

異なる世界に住む者にも、彼らの生活、彼らの人生があると言うのに。

それを破壊するディケイドを放っておく事は、「魔術師」と言う立場としても許せないし、何より私が個人的に許せない。

と言う訳で、今日から奴を徹底的にマークし、「世界の破壊」を防ごうと思う。

そう言えば、大シヨツカーからディエンドライバーを盗み出した彼は、今頃どうしているだろうか。彼ならば、ディケイドを葬る事ができる。そう思って、私は彼をディケイドの世界に招き、そしてディエンドライバーを盗ませたのだ。

いつまでも勝手気ままに遊ばれては困るが、今後の彼の行動に期待しよう。

今のところは彼の力が無くとも、何とかかなりそうではあるが……いや、油断は禁物だ。何しろディケイドは世界の破壊者なのだから。

奴を葬るためにも、まずは奴が訪れるであろう「9つの世界」に先回りしなければ。

そこにライダーがいる限り、奴はライダーを葬り、世界を破壊する為にやってくるだろうから。

……そのためには、まずは「クウガの世界」のライダーに協力を仰がなければならない。幸いな事にあの世界にいるライダーは、非常に単純でお調子者だ。深刻な表情で話せば、おそらく簡単に私の言う事を信用するだろう。

と、言う訳で、今日はもう寝よう。

ダイエツトとディケイドを葬る為の行動は明日からだ。

某月某日、うす曇り、「クウガの世界」

ディケイドがこの「クウガの世界」に現れた。話を盗み聞いた感じでは、奴は記憶を失っているらしい。

何故だかは知らないが、それはそれで好都合だ。とは言うものの、やはり念には念を。既にクウガこと小野寺ユウスケには、「ディケイドは悪魔、破壊者」と言い含めてある。私の事を信用している様だし、倒すまでは行かなくとも、怪我を負わせるくらいは出来るはずだ。

この世界にもたらされた滅びの現象……グロンギの活発化が加速度的に進んでいる。やはりディケイドは世界の破壊者だ。早く手を打たなければ。

しかし驚いたのは、ディケイドが「彼女」……光夏海と共に行動をしているという事。

今はまだ力を持っていないが、彼女が力を持てば、ディケイドを葬る事は簡単だろう。しかしこれは偶然なのだろうか。

世界を破壊する「悪魔」の脇にいる少女が、最後の切り札とは。こういうのを、「神の采配」とでも言うのだろうか。

……神と呼ばれている私が言うのはおかしい気もするが。

某月某日、快晴、「龍騎の世界」

何と言う事だろう。この世界もディケイドによって破壊されてしまった。

この世界では、桃井玲子の死が必要不可欠だったのに。

ディケイドがタイムベントで時間介入したせいで、歴史が狂い、「本来辿るべき未来」が完全に破壊されてしまった。

しかも、よりによって龍騎まで手懐けるとは……やはりディケイド、相手の正常な判断力を何らかの方法で破壊し、味方に着けているに違いない。

だが、私は騙されんぞ、ディケイド！ 貴様は世界の破壊者なのだ！

私が今日、不審者と間違われて警察に連れて行かれそうになったのも、全て奴が悪いのだ！

しかし、この世界に連れてきたパラドキサアンデッドには、悪い事をした。本来住むべき世界とは違う為か、随分と行動が制限されていたようだ。きっとアビスとしてのシステムが、彼に合わなかったに違いない。

大体、なぜ「龍騎の世界」のライダーには昆虫モチーフがないのだ？ 龍とか不死鳥とかよりも、身近に存在する動物ではないか。パラドキサアンデッドは蠐螬の祖だから、蠐螬モチーフのデッキならきつとディケイドを倒せたはずだ。鮫だったのは痛かった。

それでも使いこなしていたのだから、大健闘と言うべきなのだろうが、倒せなければ意味が無い。

やはり次の世界で葬るのがベストだろうか……

そう言えば、これを書く前に体重を量ったら、以前量った時よりも2キロ程増えていた。そう言えば最近、ベルトも少しきつい気が

する。

やはり、ディケイドを倒せない事によるストレスでドカ食いをしているせいだろう。おのれディケイド！ 私を生活習慣病にしてじわじわと鬬り殺そうという魂胆か！

私は負けん！ ディケイドにもメタボにも！

とりあえず、明日からランニングを始めよう。服装の乱れよりも先に、自分の体型の乱れを何とかせねば……！！

某月某日、土砂降り、「響鬼の世界」

……疲れた。

その一言しか出ない。

ディケイドを倒す協力を得るために、音撃道の戦士達に話をつけに行ったのだが……

まずは威吹鬼流。何故この私が華道やら茶道やらをせねばならんのか。終いには百人一首大会になっていた。しかも

「勝つまで出さないよ」

と爽やかな笑顔で言われる始末。

……4時間ぶっ続けの正座で、足の感覚が無くなったではないか。最後の方は仕方が無いのでいつものように世界を移動して逃げたが……恐らく、見つかったら修行と言う名目で監禁されるだろう。

冗談ではない。それは御免こうむる。

次に向かった斬鬼流は……熱かった。「暑い」では無い。「熱い」だ。

筋骨隆々の男達がひたすら武芸に打ち込むと来た。いや、それは構わない。鍛える事は実に素晴らしい。

……だが、こちらを巻き込むのはいかなものか。ディケイドを倒す助力を乞うているのに、

「ならば、この俺を倒せたら協力してやる」

とは……

自分にそんな力が無いから、助力を乞うているのが何故分らないのだろう。脳みそまで筋肉なのか？

お陰で打ち身、捻挫、擦り傷だらけだ。この後バケガニを解放せねばならないと言うのに。

やはり、全てはディケイドのせい。奴が倒されてさえいれば、私とてこんな目にはあわなかった物を……！ お陰でこちらはぎっくり腰一歩手前ではないか！

最後に向かった響鬼流の連中は……子供とやる気のない中年男性では、正直助力云々言っていられる状況では無いではないか！

端から見ていると、典型的な「ダメ親父としっかり者の子供」だった。

見ていてアスムと言う少年が非常に不憫だった……

おのれディケイド、奴のせいであんないたいけな少年が苦勞をしているのだ！ やはり奴は悪魔に違いない。

追記、先程、「星」連中から購入した服を着たら、ズボンのボタンが止まらなかった。

……とうとうこの私に、ダイエットの宣告が下されたのか。

……おのれ、おのれええええ、ディケイドおとおおっ！

某月某日、晴れ時々念動力、「BLACKの世界」

大ショッカーが本格的に動き出した。

これは早くディケイドを倒さなければならぬ前兆だ。

今のところ、記憶の無いディケイドは、自分の組織を自分で潰そうとしているようだ……記憶を取り戻した時が危険だ。何故ディエンドは早く彼を倒さないのか。

……やはり、「ディエンドの世界」以降、海東大樹の様子がおか

しい。ディケイドを手助けするような素振りが多く見受けられる。
まさか、彼も破壊されたのか!?

それは不味い。非常に不味い。ディケイドとディエンドが手を組んでしまったら、もはや頼みの綱は「解説」のドライバーしか無いではないか。

しかしそれも行方不明。このままでは、ディケイドの思う壺、世界はどんどんと破壊されてしまう。

それに……唯一の希望である光夏海が、アポロガイストの手によってその命の灯火を奪われてしまった。あれは恐らく、ディケイドの巧妙な罠だ。自分を倒す可能性のある彼女を、今のうちに葬ろうとしたのだろう。

しかし、彼女の事だ。きっと助かる。助からないはずがない。

しかし、ディケイドを追って来たら……なにやら厄介な世界に到着してしまったようだ。

灰色の三葉虫が鬱陶しくも襲ってきたので、思わず久し振りに「神」の力を振るってしまった。

……どうせ「世界」が作った世界だ、あの程度問題ないだろう。

大事の前の小事、ディケイドの前のゴルゴムだ。

そう、全てはディケイドの仕業だ。私のせいではない。

朝、目玉焼きの黄身が潰れていたのも、最近のデフレスパイラルも、消費税の引き上げをしようと煩い政治家連中がいるのも、全てディケイドの仕業に違いない。

ちなみに、この世界の仮面ライダーは、何かあると

「ゴルゴムの仕業か!？」

と言うらしいが……それすらもきつと、ディケイドの策の1つだ。ゴルゴムの仕業に見せかけた、ディケイドの仕業。

……何と巧妙な手口! おのれディケイド、どこまでも……!!
そう言えば、最近ようやく腹回りの贅肉が落ちてきた。

……代わりに、ストレスによる十円ハゲができている事に気付いたが……帽子で隠れて見えないのでこの際気にしない事にしよう。

ストレスの原因は分っているのだ。
早く排除して、このハゲともおさらばしたいものである。

某月某日、槍、「ドライの世界」

な、何故だ!?

何故いきなり攻撃されたのだ!?

この世界の仮面ライダーに、

「共に悪魔を倒そう」

と声をかけたただけだと言うのに。青いライダーには

「……なあおっさん、何で俺に言うの」

と無下にされ、赤いライダーには

「寝言は、寝て言ってくれないかな?」

と即答。緑色のライダーに至っては、

「悪魔を倒すだ? 分った、敵だな」

と持っていた槍でどつき回されそうになる始末。

思わずその場から逃げたが、何故、敵認定されてしまったのか、甚だ疑問だ。

……はっ! もしやこの世界は、既にディケイドの手に堕ちていたのか!?

おのれディケイド、どこまでも抜かりのない……!

しかし、そうだとしたら完全に私の失態だ。既にこの世界が破壊されていたと気付けなかったとは。

可哀想だが、この世界はもう救えない。かくなる上は、スーパーショッカーを立ち上げ、私自らディケイドを葬る事でこの世界にかげられた、ディケイドの呪縛を解き放つ事にしよう。

幸いにも、「星」の奴からコスプレセットとスーパークライシス要塞を購入したばかりだし、まあ何とかなるだろう。

後は、今日買った宝くじが当たるのを祈るばかりである。外れた

ら……それはやはり、ディケイドのせいだ。
とりあえず、私を助けてくれたあの青年に幸多からん事を。

＊

「……何これ？」

「……どこかの可哀想なおじさんが書いた、可哀想な中身の日記」
ひらひらと赤い表紙のノートを見ながら、僕……降幸零は思わず隣にいたゼロに向かって問いかけていた。

他人の日記を見るのは、非常に申し訳ない行為ではあるのだが、
見覚えのないそのノートの中身が気になって開けてみたら、さっきまでのような状況だった、と言う事だ。

……鳴滝さんって、この間、なんか家の前でボロボロになってたおっさんだよね。

思わず家に上げてしまったのを覚えているが……このノートは、
おそらくその時の忘れ物だろう。

「この世界で、しかも乾さん達に『悪魔を倒す』なんて言ったら……」

「まあ、敵認定だろうね。何しろこの世界、『悪魔』の統治する世界だし」

だろうなあ、と思いながら、僕はパタンとノートを閉じてとりあ
えず元にあった場所に戻しておくのであった。

「え、放置？ 廃棄じゃなくて？」

「……見なかった事にする」

完全放置を決め込んだ僕に、ゼロは苦笑いを返した。

彼も手を出さない所を見ると、やはり関わりたくないのだろう。

……日記の内容を見る限り、きつと鳴滝さんは今頃叫んでいるん
だろうなあ……と思う今日この頃。

＊

そして、日記をなくした事に気付いた鳴滝さんとは言うところ……

「おのれディケイドおおおっ!!」

……「22の神々」のうちの1人、「魔術師」^{マグス}の夜は、その一言で終わるのであった。

I : The Magician (魔術師) (後書き)

零&ゼロ様、友情出演。

故にギャランティはなし。

……うん、すみません。鳴滝さんのイメージはこんな感じです。

日記形式にしてみました。いかがでしたでしょうか？

「鳴滝さんはこんな人じゃない！」

と言うご意見もあるかと思いますが……そこは辰巳クオリティ！どこまでもギャグに走りたがる作者（と言う名のダメ人間）故……何卒寛大なお心で、生温い（「なまあたたかい」では無く「なまぬるい」）目でごらん頂けましたら幸いです。

では、失礼致します。

V::The Hierophant 法王 (前書き)

先に謝ります。

色々ごめんなさい。

この「法王」(別名、教皇)に関して言えば、設定上「石○浩二」氏になってしまったため、こんな形になりました。

もはや日常でも何でもありませんが……

もう1回謝ります。

本当にごめんなさい。

V::The Hierophant 〔法王〕

——これからしばらくの間、あなたの目は、あなたの心と体を離れて、不思議の世界へと旅立つのです……——

さて、皆さん。先に述べた台詞をご存知でしょうか。

これは、「私」……「法王」と呼ばれる者が、最初に創った世界……「ウルトラQ」と呼ばれる世界の、オープニングナレーションです。

え？ 何故「ナレーション」などと言うのかって？

これは失礼。私の目的を申し上げておりませんでしたね。

私の目的は、「私の世界を皆様に知ってもらう事」にあります。日常に潜む、ほんの少しの摩訶不思議。「身近にあるかもしれない、だけど絶対にあいえない」……そんな風な世界がある、と言う事を、この世界の皆様に知って欲しかった。そのために私が取った手段が、テレビです。

皆さんの中では虚構の世界だとしても、「こんな物語があるのだ」と認識して頂く……それが、私の第一目標でした。

なぜなら、誰にも認識してもらえない世界ほど、悲しく、寂しい事はないからです。

勿論、その世界の住人は、「存在している」と認識しているでしょう。ですが、それでは駄目なのです。

——他人の記憶に残ってこそ、その世界は虚構として成立する——

これが私、「法王」の持論です。

私の作った世界の住人は、「その場」こそが彼らの生活の場。即ち「現実」なのです。いいえ、決して私は「現実である事」を否定

するつもりはありません。現実である事は、支えにだってなるでしょう。

しかし……私は、「22の神々」のうちの「誰か」によって、私の創った世界を破壊される可能性を懸念しました。

さて……そうなってしまったら、私はどうしたら良いのか。

悩んだ結果この世界を「虚構だ」と、因果律の異なる世界の方々に思わせ、記憶してもらう事にしましたのです。

そうすれば、例えば私が……そして私の作った世界が消えてしまっても、外の世界の誰かが覚えていてくれる。それはある意味、彼らの存在が生き続けるのと同じ事です。

なぜなら、記憶の中の物語までは誰も消せませんから。

ましてそれが因果律の異なる世界の方々……おっと失礼。わかりやすく言えば、テレビの前の「視聴者」の皆さんや、もっと身近に言うならば、この文章をご覧になっている「あなた」ともなると……「22の神々」であっても、あなたの記憶にまでは手は届かない。だから、忘れられないように、「ほんの少し不思議な世界」を作り上げました。

3人の若者……万城目淳、戸川一平、江戸川由利子を中心に据え、怪獣や怪人、果ては怪植物などの「不思議な存在」を登場させて、皆さんの記憶に残るようにと。

勿論、私もほんの少しだけ、その手伝いをさせて頂きました。

それが先程の「ナレーション」。担当して下さった方の口をほんの少しだけお借りして、私の「想い」を乗せました。その時の影響なのでしょう。その方は何年経っても、あまり老化した様子が見られません。せいぜい、少し髪が白くなったかな、程度です。

しかし、私自らが思いを乗せた為なのか、それともそのお方が元々私とシンクロしやすい方だったのか。随分と様々な方の記憶に残ったようです。

それが「ガラモン」や「カネゴン」、「ケムール人」と言った、「怪人・怪獣」であった事には、私も少々驚きましたが。

そのせいでしょうか。私が次に創った世界は、「光の巨人と巨大怪獣が戦う世界」でした。

そう、「ウルトラマン」と呼ばれる彼らの登場です。

彼らには、「ウルトラQ」の遺伝子を継いでもらっております。

お気付きですか？ 「ウルトラマン」のオープニング。

物語が始まる直前、マールブル模様が浮かび、それが破れて赤地に白で「ウルトラマン」とタイトルが表記されますね。

あのマールブル模様……実は白字で、「ウルトラQ」と書かれています。

……「Q」の殻を破って、「ウルトラマン」になる。彼らもまた、私の願いから生まれた存在です。

その名残でしょうか、あの世界には、「Q」の江戸川由利子によく似た女性が、隊員として登場しています。

ああ……またまた失礼。長々と私の「願い」などを語ってしまいました。

何しろ私は、この世界に実体を持たない物ですから……つい、こういう形でしか、皆様にお会いする事ができません。

日常、と言われましても、私はただ、浮遊する意識だけで……皆様に、ほんの少しだけ奇妙な世界を体験して頂く「案内人^{ストーリーカー}」ではないのです。

憂鬱と言えば、こんなエピソードがあります。

先程も挙げました、「ウルトラマン」。その有名なシーンで、主人公のハヤタ隊員がカレーを食している際、怪獣が登場、屋上でその姿を見つけ、変身しようと懐から掲げたのは……スプーン。直後に間違いに気付き、彼はそのスプーンを放り投げ、気を取り直して変身する……と言う物があります。

しかし、このシーンは私にとって、なかなか憂鬱でした。

実はハヤタ隊員……警報が鳴った時、カレー皿にスプーンを置いて

で行っているんです。それこそ、投げ捨てるように。

……マイスプーン所持の、決定的な瞬間です。

彼は一体、何を考えてあんな紛らわしい物を持ち歩いているのでしょうか。そもそも、そのスプーンは一体どこから……いや、やめましょう。気にしだしたら限きりがありません。

「気にしましょうよ『法王』」

おや、その胸のポチポチは……ゾフィーじゃありませんか。どうなさいました？

「いえ、ここに依頼書があるんですが……『法王』に関しては、ウルトラシリーズのツッコミをひたすら入れて行っ下さいと言う、作者から。あと、人の名誉あるスターマークをポチポチとか言わんで下さい、腹立つ」

ああ、ページ稼ぎですね。成程。

「身も蓋もない言い方しないで頂きたいのですが」

しかしゾフィー、あなたよくそんな小さな文字が読めますね。普通の人間サイズの嘆願書ですよ？ しかもウルトラサインでもないですし。

「ですから、そう言う事言わないで下さい。いきなりツッコミ所になります」

それもそうですね。まあ良いでしょう。近隣のM25星雲の指揮を放って何をしてる、とか、そんな事は言いませんとも、ええ。

「言ってますよね、物凄くはつきりと。何でか知りませんが、私もゲストに呼ばれてしまったんです。でなきゃ来ませんよ、こんな場所」

おや、そうでしたか。

しかし「こんな所」とは失礼な。

「すみません。つい本音がぼろっと。根が正直者なものですから」

まあ、良いでしょう。

さて……とは言っても私はまた身も蓋もないツツコミを入れますよ？

「……聞きたくないですけども、聞かないと話が進みませんね。……何ですか」

光の巨人に変身する人間達に対してなのですが……質量保存の法則はどうなった、と。

「本当に身も蓋もないですね」

物理を学ぶ者なら、誰もが必ず通るツツコミだと思いますよ？

「いや、だってカラータイマー奪われたらスーツだけになってしまふ時点で、既に質量保存もへったくれもありませんよ」

いきなり自らの存在否定に入りましたね。

「そりゃあまあ……事実、あれは無いわあ……」と思った事は確かで

すし」

まあ、そうですね。BMIの計算式であなた達の値を出したら、完璧な肥満です。BMI2万2千ですよ？ 体重（キロ）を身長

（メートル）の二乗で割る、あの計算式です。

日本では22が、世界基準でも25までが標準です。それを超えたら肥満扱いですよ？

「あれは、人間換算だからです！ 我々換算なら、それくらいで丁度良いんですよ！ そもそも、そう設定したのは『法王』、貴方でしょうが。何ですか、私の体重4万5千トンって」

当時はボディマス指数なんてありませんでしたからね。適当な数字を入れておけば、「凄いや！」とお子様の心をがっしりと掴めたのですよ。

そうですね、某ちりめん問屋のご隠居に扮した「先の副將軍様」が、葵の御紋付きの印籠を出すシンくらいには。

まあ、それはこの際おいておきましょう。

他のツツコミとしては、「あの体型で本当に音速飛行が可能なのか」と言う話もあります。

「は？ 何ですかいきなり」

貴方達……BMIはさて置き、ごく普通の人間体型ですよ？

「ええ、まあ。少なくともSFに出てくるような、イカとかタコとかそんな感じの姿ではありませんね。って言うかBMIはいつまで引っ張るんですか、もう良いですよ」

人間体型の者が、音速で飛行なんてして御覧なさい。首がもげて

グロい事になりますよ？

似たような事が、某青い猫型ロボットがよく取り出す、空を自由に飛べる機械とも言えます。あれを忠実に再現したら、間違いなく装着者は目を回すか首がもげるか頭皮吹き飛ぶかのどれかです。

「……子供の夢をぶち壊すような事を言わないで下さい！ 首もげるとか……いや、普通に勘弁して下さい。何でそんなに今回物理的なツツコミなんですか。そもそも、それ言っちゃったら殆どの宇宙人が、空飛ぶのが駄目になるじゃないですか」

いえ、この文章に目を通す方々は、基本的には良い年齢の方ですからね。一応事実として検証して頂こうかと。

それに……不思議の世界だから何でもアリ、と言う訳ではありません。

「いや、既に我々の世界は『何でもアリ』に近い状態になっている気がします。死人を初っ端から生き返らせてますし」

しかし、無敵ではないでしょう？ 敗北もすればドジもする。人間の助けだって必要になる時が来る。そう、お子様向けのショーの様に、「頑張れー！！」と言う声援が力になる事が。

「……容認したいのか、否定したいのか、どっちですか……」

どちらでもありません。私はただ、外の世界の誰かの記憶に残れば良いと……そう思っているだけですから。

それでは、私の暇潰しに付き合ってください、本当にありがとうございます。またいつかどこか……貴方を不思議な世界へご案内する時まで。

「つて、こんな身も蓋も山もオチもなくですか!？」

V::The Hierophant 〔法王〕（後書き）

……こんにちは。

別名、辰巳のツツコミである今回、如何だったでしょうか。

ごめんなさい、ごめんなさい。

本当にごめんなさい。

ああっ石投げないで！！

別に、ウルトラマンが嫌いな訳じゃないんです。むしろ好きな部類に入ります。

しかし……しかし！

年齢詐称疑惑のある辰巳が知っているのは、「Q」と「マン」と「セブン」のみ！

「コスモス」は隊長（嶋大介さん）目当てで見ましたが、それも後半のごく僅かな間。

間は全く知りませんし、その後も全く興味が無……（黙れ）。

早い話、私は「ウルトラシリーズ」にあまり燃えを感じられないんです……

と言う訳で、「法王」様のお力を借りて、今回私の光の巨人に対するツツコミを後半にぶち込んでみました。

ウルトラマンキッズは好きなんだけどな。

バルタン可愛いし。ダダとかゼットンとか（結局初代じゃねーか）！

正直、「Q」の最終話、「あけてくれ！」は時の列車の1つなのではないかと、今では信じて疑いません。

……語りだしたら止まらなくなりそうなので、この辺で失礼致します。

最後にもう1回、全てのウルトラファンの方に……
本当にごめんなさい。

西暦2010年7月13日

誤字の修正とちよつとだけ追記（BMIの計算式とか、ゾフィーの
体重とか）。

XII: The Hanged Man (吊られた男)

——暇だ——

ぼんやりと、ミラーワールドを統べる存在……「吊られた男」と呼ばれる彼は思った。

契約モンスターとしてこの世界に存在するのは良いが、彼の契約者は、基本的に彼を使おうとしない。使わなくとも、かなりの強さを誇るからだ。

——タイムベントなど、作らなければ良かったか——

伏せていた瞼を開き、隠れていた左右で色の違う瞳が覗く。

「神」である彼にとって、目を開いていようが閉じていようが見える物に大差は無い。単純に気分の問題だ。

自分の創ったこの世界……ミラーワールドは、基本的に「始まりの地」と呼ばれる世界の隣にある。

「隠者」やら「塔」やら「月」やらが、せせこましく狙う中、彼が「始まりの地」を狙う理由はたった1つ。

……ただの「暇潰し」だ。

勿論、表の世界が欲しくない訳ではない。だが、他の連中のように、積極的に攻め込んで行こうと言う気になれないだけだ。

そんな自分を見て、ある者などは「慎重に物事を運んでいる」と思われがちなのだが、実際は単純に面倒臭いと思っているだけに過ぎない。

——面白い事でも、あれば良いのだが——

ぼんやりと思いながら、彼はその黄金の羽根を羽ばたかせる。

呼ばれていない間は、何をしても良いのだから。
そして彼は、面白い事を求めて、自分の持つもう別の世界……ま
ずは「ネガの世界」と呼ばれるそこへと向かった。

＊

「俺の名は紅音也。将来教科書に載る、偉い人だ」

——鬱陶しい——

遠目から眺めながら、彼は誰かに向かって自己紹介する「紅音也」
ことダークキバに対して、思わずそう思ってしまった。

身振り手振りが大仰で、言葉遣いも芝居がかっている。

真剣になれば、その分ギャップが激しいのだろうか。

この世界は、ある意味自分の得意とする「反転した世界」だ。た
だし、物理的に反転した訳ではない。性質的に反転した世界。

即ち、ヒトは怪人に殺され、その怪人を支配する者が「仮面ライ
ダー」。

「始まりの地」の人間から見れば、間違いなくこの世界のライダ
ーを「悪」と認定するだろうが、この世界の住人からすればそれが
「当たり前」であり、紛う事なき「正義」である。

——まあ、怪人が中心の世界ならこんなものか——

自分で作った世界でありながら、あまり面白みを感じられない。
始まりの地の侵略が成功したらどうなるか、をこの世界で試して
みたのだが……想像以上につまらない世界になってしまったと、彼
は思った。

人間にとっては戦々恐々とした世界なのだろうが、彼から見れば
平和そのものの世界でしかない。何しろ、怪人同士で争う事が無い

のだ。

ライダーによる粛清はあるかもしれないが、あくまで彼らは管理者。自分の義務を果たしているに過ぎない。

「歓迎の証だ、一曲弾いてやる」

一体誰を歓迎しているのか知らないが、音也は持っていたバイオリンケースからバイオリンを取り出すと、邪悪さなど微塵も感じられない音を奏でます。

普通に聞けば、清んだ音楽だ。ただ、彼の祝福が、人間ではなく怪人に向いていると言うだけで。

——それはそれで、つまらない——

くあ、と溢れる欠伸をかみ殺しもせず、彼は子守唄のように響く音也の音楽を聞き流す。

彼の退屈を紛らわす事ができるのは、暴力だ。常に起こる、適度な闘争。

絶滅する訳ではないが、増えすぎる訳でもない程度の。

そう言う意味では、この世界は実験としては失敗だ。人間に対する蔑みはあっても、仲間……即ち怪人に対しては非常に寛大。

人間がいなくなれば、恐らくこの世界に訪れるのは、怪人にとっての平和になるだろう。

——作りたい世界は、そんなものではない——

そんな風に考えながら、彼はじっと音也を見つめる。

恐らくは、彼なりに「平和」を考えているのだろう。だが、それは決して彼の望む世界ではない。

——自分が作った世界だと言うのに、上手くは行かない物だな——

ふう、と溜息を漏らすと彼は再びその金色の翼を広げ、別の場所にあるもう1つの世界……「ベンタラ」へと向かって行った。
まさか、音也が「歓迎」していた人物が、「世界の破壊者」だとは気付かずに。

＊

「行けい、仮面ライダーストライク！」

——ここもまた、鬱陶しい——

溜息を吐きたいのを堪えながら、彼はそう指揮する異形を見つめる。

異形の名は、ゼイビックス。この世界を闘争で満たす為だけに作った存在なのに、どういう訳かこの世界の人間を拉致、「自分の惑星」とやらの復興に使っているらしい。

それは、かつて自分が作った架空の設定なのだが……その設定を忠実に再現した結果、「ベンタラ」からは誰もいなくなってしまうた。

そして次に彼が目をつけたのは……「地球」、つまり「始まりの地」だ。どうやら、自分が作った際、ミラーワールドのように行き来し易く作った事が裏目に出たらしい。

——静かになってもらっては、困るのだが……——

本人としては、軽く眉を顰めたような表情を作り、彼はじっとゼイビックスを見つめる。その横には、「始まりの地」では「王蛇」と呼ばれるのと同じ格好の戦士、仮面ライダーストライクが、ゼイビックスの命令に従う為、静かに首を縦に振っていた。

どうやらこれから、彼にとっての最大の邪魔を排除しに行くつも

りらしい。

と、言う事は。

そこに、闘いが……唯一の彼の暇潰しとなる「闘争」が起こると言う事。

——ようやく、面白くなりそうだ——

クス、と笑い、彼はそのままストライクの後を追う。

「王蛇」は、戦闘が好きだった。果たしてストライクはどうだろう？

期待半分、不安半分の中、彼が見た先には……ドラゴンナイト、ウィングナイトの2人がいた。

もつとも、彼にとって2人は「龍騎」と「ナイト」と呼びたい所なのだが。

「やあ、お2人さん。元気そうで何よりだよ」

『Summon Vent』

ストライクは、いきなりカードを読み込ませて紫色の毒蛇、ベノスネーカーを召喚。その吐き出す毒液をかわしながら、ドラゴンナイトとウィングナイトもそれぞれにカードを読み込ませる。

『Strike Vent』

『Sword Vent』

普段彼が聞くよりも、かなり異なる音声が響く。

だが、言っている事は理解できる。どちらも「龍騎」や「ナイト」が使うものと同じカードだ。

召喚した武器を手に取りながら、2人の戦士は相手の毒液を何とかわかし、ストライクに向かって攻撃を仕掛ける。

「どうしてゼイビアクスの味方になんかなってるんだよ!？」

「別に。ただ、そちらの方が面白そうだと思っただけさ!」

ドラゴンナイトの問いに、ストライクは蹴りと共に答えを返す。だが、その言葉に妙な違和感がある。

本当に戦いを楽しんでいた「王蛇」とは違い、「ストライク」には何らかの目的があるように思えた。

——どうやら彼も、何かを抱えているらしい——

何かを抱えている人間は、強くもなるが……同時に、その「何か」が消えた時、加速度的に弱くなる事も知っている。

それが、大切なモノであればある程に。

「奴に何を吹き込まれたのかは知らないが、約束を守るような奴だと思っっているのか？」

「吹き込まれた？ 約束？ そんな物は無いよ。単純に楽しんでいるだけで……ね！」

『Sword Vent』

今まで召喚機の杖を主体に戦っていたストライクが、ここでもうやく剣を召喚し、相手に向かって斬りつけにかかる。

——ああ、本格的にやる気になったらしいな——

すうっと目を細め、その様子を楽しんだ……刹那。

「何故ここにいる？」

唐突に、彼の背後から、ゼイビアックスの声がかかった。

どうやら彼は、自分の存在に気付いていたらしい。

もつとも……彼にとっては、別の仮面ライダーのアドベントモンスターだと思われるようだ。自分の契約者……「オーディン」のモンスターではなく。

——私の世界なのだから、いてもおかしくはないだろう——

声に出す事はしないが、呆れたような視線をゼイビアックスに送り、彼は軽く溜息を吐く。

折角良い所だったのにと思わなくもないが、ここで彼が介入して「静寂」を呼んでもらってはなお厄介だ。そもそも、彼は自分が「神」である事を知らない。

それに……

『ADVENT』

ミラーモンスターとして生き、契約したが故に聞こえる音がした。

——呼ばれたのか。良いタイミングだ——

彼は「神」だが、自由に振舞うつもりは無い。契約と言う鎖に縛られるぐらいが、ちょうど良いと思っている。

くすり、とゼイビックスを見下すように笑うと、彼は少々名残惜しく感じながらも、その場を後にした。

呼ばれたと言う事は、この後にきつと自分が参加できる闘争が待っているのだ。他人の戦いよりも、自分の戦い。見るよりもやはり実戦の方が退屈しない。

ニマリと口の端を歪め、彼はその世界から飛び立ち……彼の契約者の元へと向かうのであった。

——今日は誰が、この私に喧嘩を吹っかけて来てくれたのだろうか

——

そんな風に、思いながら……

＊

「神崎、いい加減この世界から消えてくれよ」

「僕達の邪魔をするのは、得策じゃないですよ？」

彼が到着した時には、既にボロボロになっている「オーデイン」

……神崎士郎と、彼をそうさせたと思しき2人のライダー。

漆黒の龍を従える「リュウガ」ことミラーワールドの城戸真司と、この世界に生まれた「特異点」である「ネガ電王」ことミラーワールドの野上良太郎。

表の世界にいる彼らとは真逆の、残酷で邪悪な存在だ。

この世界で生まれ育ったせいかな、2人の目的は破壊と殺戮、そして闘争。

彼が暇潰しで生み出した存在の中でも、お気に入り2人であるのだが、いかんせんこの世界の「人間」は、この2人と神崎、そして「愚者の欠片」である少女だけ。あまりにも少なすぎるために、「闘争」は呆気なく終わってしまうのだ。

そう、今、現時点のように。

——神崎士郎も、ここまでか——

ぼんやりと思いながらも、彼は呼ばれただけの仕事はする。

リュウガの後ろに控える漆黒の龍、ドラグブラッカーを翼で叩き、そのままの勢いで2人の「住人」に対して体当たりを食らわせる。

戦いは、見るのも好きだが自分でやるのも好きだ。

人間如きに「契約」で縛られるのは、彼としては非常に屈辱的ではあるが……自分が好きなように戦っては、折角作ったこの「暇潰しの世界達」が崩壊する可能性がある。

モンスターとして、「契約」の鎖で縛られた状態で遊ぶくらいが、ちょうど良い。そう自分でも自覚していた。

「ちっ……鬱陶しいマネしやがって」

ネガ電王の口から良太郎とは違う声が聞こえる。

確か、自分が招き入れた「月の子」……ネガタロスと言う名だったか。

ダメージはそれ程受けていないらしく、声には割と張りがある。

——これは、随分と一方的にやられたようだな、神崎士郎——

聞こえていないとはわかっていながらも、彼は何の感慨も無い様子で神崎を見やりながら呟く。

その呟きも、目の前にいる彼らにとっては、ただの鳴き声にしか聞こえないだろうが。

——これでまた、暇な生活に戻るのだろうか——

今にも殺されそうな神崎の姿を見て、彼はつまらなそうに思った瞬間。

……妙な気配を、感じた。

——誰かが、この世界に逃げ込んできた——

正式な手順を踏んでいない、半ば強引な方法で「こちら」に誰かが来たのを察し、彼は意識を集中させる。

この世界に入る方法はいくつかあるが、正式な手順は自分が暇潰しに作ったデッキを使用してやってくる方法。

別の手段は「皇帝」の配下達の作った「時の列車」で乗り込んでくる方法。

上のどちらの方法も、一応正式な手順だ。こんな風に彼が不機嫌になるような事ではない。後者として、自分が招かなければ良いだけの話なのだから。

しかし、強引に扉をこじ開けて入ってきたとなれば話は別。

土足で我が家に入られるような物だ。あまり良い気分ではない。程なくして、その「不快」の原因を突き止め……彼は心の中で、深い溜息を吐いた。

——やれやれ、「奴」か。鬱陶しい——

無意識の内に、彼の目はずっと細められ……そして、彼の生んだ子供に対して命令を下していた。

部外者を、排除しろと。

その命令を受け取ったのだろう。住人は無意識の内にこくりと頷くと……

「邪魔が入ったみたいだね」

「そうだな。今回は見逃してやるよ」

それだけ言って、神崎の前から2人は姿を消した。

「助かった……のか……？」

——余計な邪魔が入ったからな——

神崎の呟きに答える様にしながら、彼……「ゴルドフェニックス」もまたその場から姿を消した。

……「余計な邪魔」を、消し去る為に……

——やれやれ……暇な物だな、「神」などと言う物は——

そう、心の中でひとりごちて。

XII: The Hanged Man (吊られた男) (後書き)

「吊られた男」……ドラッグブラッカーと間違われがちですが、本当はゴールドフェニックスです。

と言う訳でどうも、辰巳です。

何やら中途半端この上ない終わり方ですが、この後まで書いてしまうと本編のネタバレ極まりないので、ここで終了。

え？

「本編って何よ？」

……えー、現在連載中の作品の事です。どれの事かは、ご想像にお任せいたします。

(バレバレだけどね！)

(そもそも、宣伝か？ 宣伝なのか!?)

と言う訳で、本日はこの辺で失礼致します。

この所、頂いた感想をビクビクしながら読んでいる辰巳でした。

……それにしても、暑い……

XV::The Devil (悪魔)

どーも。三砂乾だ。

とりあえず、俺を知らない人が居るかもしれないから簡単に自己紹介しよう。

この世界は、「ドライの世界」などと呼ばれていて、「地火風水の何れかの力を自由に扱える人間」を「エビル」と呼ぶ。俺はその中でも「水のエビル」と呼ばれている。

その水を操る力を持つが故に、俺は「ドライ」と呼ばれる戦士に変身、人間を皆殺しにしようと企む化物、「天死」を倒す為、双子の兄で「炎のエビル」である二動燃と、幼馴染の「風のエビル」である一器と共に戦う毎日だ。

さて、軽く自己紹介も済んだところで。

この「ドライの世界」を治めているのは、「悪魔」って名前の神だ。ちなみに、天死の親玉は「死神」と言う名の神らしいが、今回は特に触れずにおこう。

話を戻す。

「悪魔」ってのは、ぶっちゃけ俺と燃の父親……三砂・ミハエル・彰人の事らしい。俺もこの事実を知った時は流石に驚いたぜ。

ここからの話は、まだ天死共との戦いが本格的になる前。

親父殿とお袋が、離婚した直後くらいの話を語らせてもらう。

……正直、思い出したくも無いんだがな……

「ダーリン」

「何だい、マイ・スウィート・白雪」

……何故だ？

と、朝から俺はげんなりしながらそう思う。

何しろ、お袋……二動・ブランカ・白雪は、つい最近、親父殿と

きっぱりと離婚が成立したはずだからだ。それなのに、何故、そのお袋がラブオーラ振り撒きながら親父の側にいるのか。

しかも普通に鍋持ってるし。そこから何だか怪しげな色の煙が上がつてるし。

「あ・さ・ゴ・ハ・ン。作ったの。食べるでしょ？」

「本当かい。嬉しいな、勿論、頂くとも。君の料理は天下一品だからね」

いやいや待て待て。

とりあえず色々とツツコミ所満載だぞ、親父。

「あら、乾。おはよう」

「何だ起きていたのか乾」

「起きていたのか、じゃないだろう親父殿。何でお袋がいるんだよ、ここに」

「何でって……居ちゃ、いけなかったのかしら、ダーリン!？」

「まさか。君は私の側に居てくれて良いんだよ。むしろいつでも大歓迎さ。乾のアレは、反抗期って奴だよ」

待て貴様ら。誰が反抗期だ、誰が。

普通、不思議に思うだろ!？ 離婚したばかりの2人が、何で未だにいちやつしているのかとか、鍋のその怪しげな色の煙の正体は何なのかとか、しかもあの料理を見て何で親父殿は「天下一品」とか言う寝言をほざけるのかとか!!

これで2人とも、世界屈指の科学者だとか言うんだから、世の中ってのは当てにならない。

「そんなにいちやつしてるなら、離婚なんかしなきゃ良かっただろうが……」

「んー……ダーリンの事は愛しているけど……」

「そうだぞ乾。これは深遠な大人の恋! 結婚などと言う下らない契約よりも、恋人同士と言う甘い響きをとった結果だ!」

うわウゼエ。

俺はまだしも、その「深遠な大人の恋」とやらのせいで、燃は苗

字変わったんだぞ？ 子供の迷惑を考えろ、頼むから。

って、そもそもお袋がここにいたら、燃の生活大丈夫なのか！？
いや、むしろここに居る方があいつにとっては平和なのか！？

あ、なんかそんな気がしてきた……

「はい、ダーリン。あーん」

「あーん。うん、相変わらず美味しいな白雪。このジャリジャリ感が堪らない」

親父殿の口に運ばれる物を見て、俺は思わずふいと目を反らしてしまう。

アレ……料理なのか、本当に。鍋から噴いてる煙はパッションピ
ンクだが、親父殿の口に運ばれてるブツは黄色と青の縞模様だった
ぞ！？

いや、その前に「ジャリジャリ感」って何だ！？ 料理にそんな
物必要ないだろう、普通……！

「何だ乾、物欲しそうな目で見て。……やらんぞ」

「いるか！ 俺は普通に昨日買った食パンで良い！」

半ば怒鳴るようにそう言うと、俺は昨日買ったばかりの食パンを
探す。しかし……肝心のパンは、どこにも見当たらない。

……おかしいな、確か昨日、買ってこの中に入れておいたはずな
のに……

「ああ、乾。それなら昨日おとーさんが食べたぞ」

「……はあ！？」

「いやあ、小腹が減ってなあ。つい」

「『つい』じゃないだろう親父殿！ 『小腹が減った』レベルで一
斤丸々食いきってんじゃねえええ！」

そう。そうなのだ。

確かに昨日、俺は食パンを一斤購入した。普通に考えて、一斤な
んてそう簡単に食べられるような量では無いのだが……どうい
う訳か家の親父殿の食欲は底なし。

「サンドウィッチと言うのはだな、サンドウィッチ伯爵が考えたからじゃなくて、^{サンド}砂と^{ウィッチ}魔女以外は何でも挟んで食える事から付いた名前なんだぞ！」

などと平然とのたまえる男だ。昔その話を聞いた時に、「親父ならサンドもウィッチも挟んで食う」と幼心に思った物だ。それくらい、目の前の男は何でも食う。

俺や燃が、明らかに食用ではないと信じて疑わない、お袋の「料理」だってバクバク食う。しかもそれを美味しいなどと言って聞かないのだから、もはや重症だ。

燃は、「離婚の原因はお袋の料理」だと思っているらしいが、俺に言わせればそんな物が理由になるはずも無い。

原因がなんなのかは知らんが、この2人の事、マジで「ただの恋人に戻りまゝす（ハート）」とか言う理由でも不思議は無い。

「ひかひなは……はらふあひえふんは」

「食うか喋るか、どっちかにしろ。『腹は減るんだ』じゃねーよ」

「ひゃいひふひえひにゃももひゃひゃら、ひははなひ」

「もう良い、喋るな、食え。『体質的な物だから仕方ない』って、

どんだけ燃費悪いんだ、あんた」

とりあえず冷蔵庫の中に残っていたヨーグルトを食いながら、俺は目の前でいちゃつく馬鹿2人から目を反らしたまま、親父の言葉にツツコミを入れる。

本当に、こういう体質なのかよくわからない。

俺から見た親父殿は、人間の三大欲求のうち、食欲だけで生きてるように見える。

眠っているのは見た事が無い。俺と燃が生まれたって事は、それなりに性欲はあるんだろうが……それもあまり熱心な方だと言う話は聞かない。

「ダーリンだけなんだから。私の料理を美味しいって言ってくれるの」

「何故だろう。白雪の手料理はこんなに美味しいのに。ああ、そうか！ 白雪の料理には私に対する愛が詰まっているからだね！」

「あん。ダーリンってば、そんなわかりきった事言わないでよ、もお〜」

……アホだ、この2人。

恋は人間をアホにする、なんて格言があるが、この2人はまさにその格言を体現している。

恋人同士がいちゃつくのは別に構わない。そこに愛があるのなら、尚更だ。存分に互いの愛を語ってくれて構わない。

……だが！ 少しは周囲の人間の事も考えてくれ！ 「自分達が世界の中心だ」とか思っているなら、いっそマジで世界の中心……北でも南でも良いから、極点に行っちゃえ！

「それにね白雪。私は君を一生幸せにすると、あの日誓ったじゃないか」

「結婚式の日ね」

「……離婚した時点で、誓えてないから」

うっとりとした様子で言うお袋に、とりあえず突っ込んでおく。

結婚式の写真を見せてもらった事が幾度と無くあるが、確か教会での結婚式だったはずだ。

写真見せられる度に、2人の壮絶な惚気に突入するので、俺と燃、それからイチとしては非常に迷惑なものなのだが、それはこの際横に置いておこう。

教会での式、って事は、確か聖書に誓うんじゃないかったか？ 神の前で、とか何とか。

……凄え勢いで神蔑ろだな、おい。

「なあに、聖書なんて紙に誓った所で、効力なんて何も無いさ。私は、私に誓ったんだ。結婚などと言う契約を破棄する事になっても、私は愛する者を守るとな」

そう言った瞬間、親父殿の目が真剣味を帯びる。

どうやら、本気で親父殿はお袋を守るつもりらしい。「離婚する

事になっても守る」と言う意味が、俺にはよくわからないが……俺の知らない何か、それも物凄く重大な事をこの人は知っていて……そしてそれを俺達に隠しながら、それでもお袋を守ろうとしているのかもしれない。

そう考えると、今まで能天気この上ない親父殿の顔が、作り物のように……

「ダーリン……素敵っ！」

「H A H A H A！ 白雪の為なら何を敵に回しても怖くは無いさ！」

……あー、すまん。やっぱりただの馬鹿親父だわ。

深遠な考えとか、絶対に無い。うん。普通にお袋に対してアホになっただけだ。

つか、何が「H A H A H A」だ、何が。

ちよつとでも、「真面目な考えがあるのかも」なんて思った俺が馬鹿だった。18年付き合ってきて、悟れないってどうなんだよ……

そんな事を思いながら、俺は心の底から誓った。

……こんな家、出て行ってくれる、と。

＊

乾が眠ったのを見計らい、ふうと私……三砂・ミハエル・彰人は深く溜息を吐いた。

白雪は家に帰した。あの家には燃が居るから大丈夫だろう。

最近息子達に私の正体を隠す事が難しくなってきた。白雪の事を愛している事には変わりないし、彼女の料理が天下一品だと信じて疑っていないのは事実だが……流石にただの馬鹿を演じるのは疲れる。

……私の名誉のために言っておくが、あれは演じているんだからな。本当だぞ！？

彼らも真実を知っても良い年頃だが……まだ、知らせる訳には行かない。

何しろ、本物の「神子」を見つけていないのだ。私の宿敵である「死神」の依り代となる可哀想な生贄が。

その子が見つかるまでは、私は乾や燃にとって、「馬鹿な父親」を演じ続けなければならない。私の正体が、この世界の「神」であると知られれば、間違いなく「死神」の配下達は私の身の回りの存在を狙うだろう。

特に、白雪の事を知られてはならない。彼女は、私が本気で愛している女性だ。

しかし……やはり自分の子供達に「馬鹿」として扱われるのは、父親としても、そしてこの世界の支配者としても、情けない物がある。

強大な力を持っても、流石に生き物の心まで支配しようとは思わない。思わないが……

「せめて、息子には尊敬される父親で有りたいんだがなあ……」

睡眠を必要としない私の呟きは、夜の深い闇へと吸い込まれる。

……尊敬してもらえない事。それが私の憂鬱だ。

XV::The Devil (悪魔)(後書き)

こんにちは。辰巳です。

今回は親父殿こと「悪魔」、降臨。

「ドライ」本編の過去の話となっております。

教会で結婚式を挙げるも、結局離婚した2人。って言うか、「神」

(名前は「悪魔」だけど)が神に永遠の愛を誓うって……

そりゃあ、確かに「自分に誓った」んでしょうね、H A H A H A …

… (遠い目)

それから、サンドウィッチの下り。

あれは、「パタリロ！」(魔夜峰央先生)と言う漫画にて、主人公であるパタリロが言っていた台詞です。

……何巻だったかは記憶にありませんが……

それでは、今回はこの辺で。

次回は多分……ヴィンテージが、芳醇の時を迎えちゃうんだろうなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3645k/>

神様達の憂鬱な日常

2011年7月30日18時00分発行